

アステラス製薬株式会社

— 記者懇談会 —

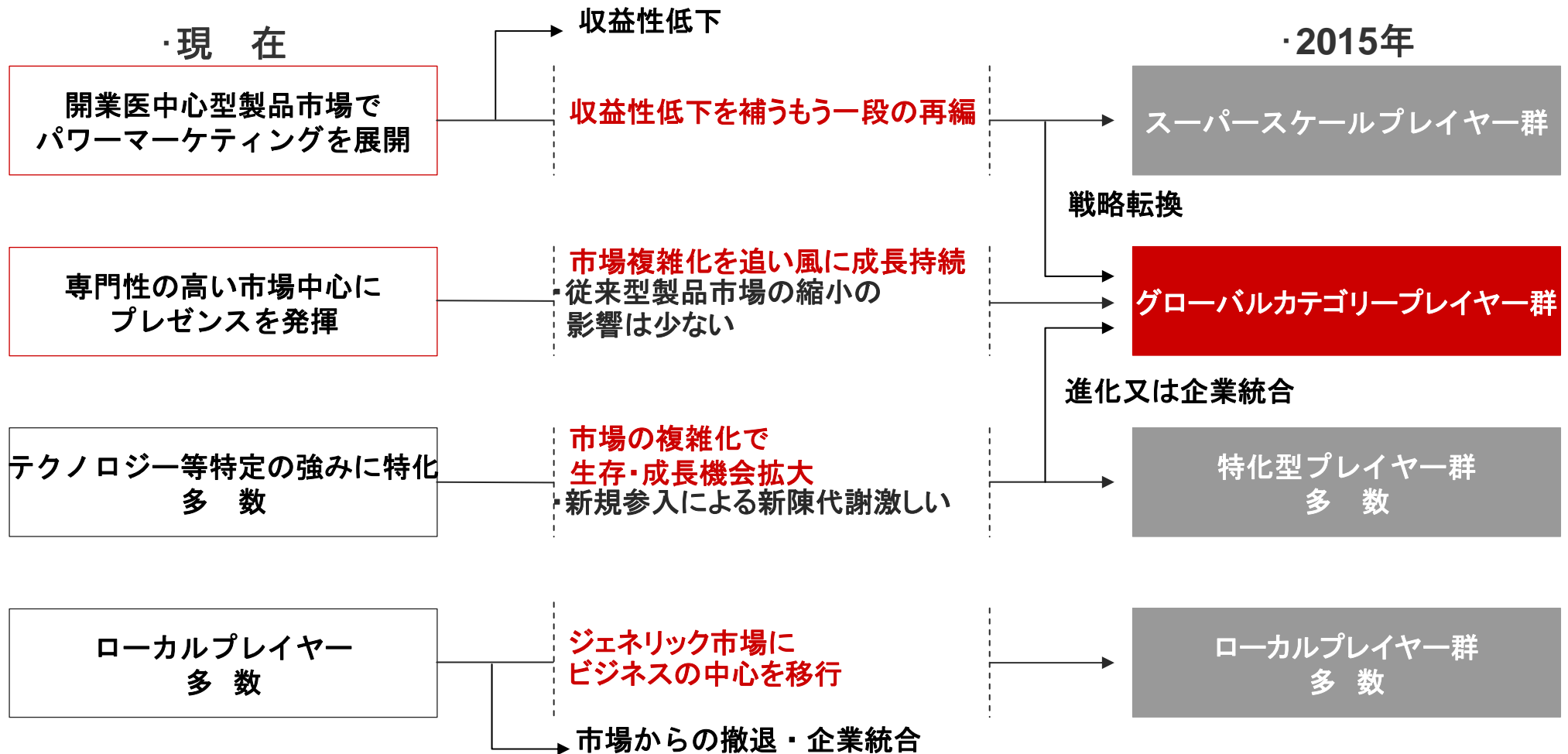
2007年 11月 28日

代表取締役社長 野木森 雅郁



- ◆アステラスのVISION・・・VISION 2015
- ◆VISION 2015への取組み
 - ◆強固なビジネス基盤の確立
 - ◆製品創出力向上
- ◆アステラスのメッセージ

VISION2015で想定するプレイヤー像



■ 専門性の高い市場を主戦場とするプレイヤーは成長を持続する可能性が高い

グローバル・カテゴリー・リーダー

GCL

将来拡大が予想される専門性の高い市場において

- アンメットニーズが高く、製品をお届けするプロセスに高い専門性が必要とされる複数の領域「カテゴリー」で、
- 「グローバル」に高付加価値の製品を提供することで、競争優位を構築し、
- カテゴリーでの「リーダー」としての存在を確立する。

2010～2015年に向けて

- 現在のパイプラインの確実な進展
- グローバル営業体制の強化
- 導入・事業開発の推進

2015年以降に向けて

- 創薬研究からグローバル製品の創製
- 重点研究領域・疾患を新しく設定
 - ①アンメットニーズ、潜在市場性、研究実行可能性からの選定
 - 泌尿器 炎症・免疫 感染症(ウイルス) 中枢・疼痛 糖尿病 癌
 - ②新規基盤技術の構築 —抗体医薬—

- ◆ アステラスのVISION・・・VISION 2015
- ◆ **VISION 2015への取組み**
 - ◆ 強固なビジネス基盤の確立
 - ◆ 製品創出力向上
- ◆ アステラスのメッセージ

VISION2015のロードマップ



強固なビジネス基盤確立

- ★担当役員制導入
- ★新組織体制移行
- ★早期退職
- ★欧州3工場譲渡
- ★欧州機能再編
- ★アジア事業本部設立
- ★インド駐在事務所

製品創出力向上

- ★研究組織改訂
- ★抗体技術導入
- ★筑波研究所 新棟竣工
- ★ARIA機能強化
- ★京大との創薬医学融合拠点
- ★STARプロジェクト始動

組織体制の刷新

11本部体制から8本部体制へ・・・意思決定の迅速化・効率的な組織体制へ

- 経営戦略本部、経営管理本部、財務経理本部、情報システム本部の本部制を廃止
- アジア事業本部の新設

担当役員制導入による権限委譲

- 野木森 雅郁（CEO）
 - 営業本部、アステラスUS、アステラスヨーロッパ、アジア事業本部、監査部
- 田村 隼也（研究開発・技術担当：CSO）
 - 研究本部、開発本部、技術本部、信頼性保証本部
- 小野坂 寛文（経営戦略・財務担当：CFO、CStO）
 - 経営企画部、ビジネスディベロップメント部、製品戦略部、経営推進部、経理部
- 大澤 敏男（経営管理担当：CAO）
 - 人事部、総務部、調達部、知的財産部、法務部、広報部、コーポレートIT部

担当役員は定められた部門を担当し、社長専決事項について社長権限を行使

欧州事業の再編

欧州3工場を譲渡(2007年1月)

- ◆ 生産体制の再構築／効率化を推進
- ◆ ミュンヘン工場、クリングアイルランド工場、カルガーデ工場をテムラーグループへ
→ 転籍によりアステラスグループとして400名人員減少

欧州機能再編(2007年度中)

- ◆ 英国・ドイツ・オランダに分散している本社スタッフ機能(学術、法務など)を英国とオランダの2箇所に統合
- ◆ オランダとドイツの2箇所にある開発拠点をオランダに集約
- ◆ 医療費抑制策が実施されているドイツにおいて、営業人員を削減
→ 欧州での人員は200名強減少

自販組織の拡充

- ◆ トルコに販社を設立(2007年7月) 19販社から20販社体制へ
欧州オペレーションのための、現時点でのBESTな組織体制を確立

アジア事業基盤の強化

アジア事業本部の設置(2007年4月)

- ◆ 今後有望視されるアジア市場での基盤強化のため、日米欧に次ぐプロフィットセンターとして発足
- ◆ アジア自販ビジネス及び海外ライセンスビジネスをマネジメント
- ◆ 免疫と泌尿器をフランチャイズ領域として自社のグローバル製品を投入
- ◆ 現在 中国、香港、韓国、台湾、フィリピン、タイ、インドネシアに販社

インド駐在事務所の設置(2007年10月)

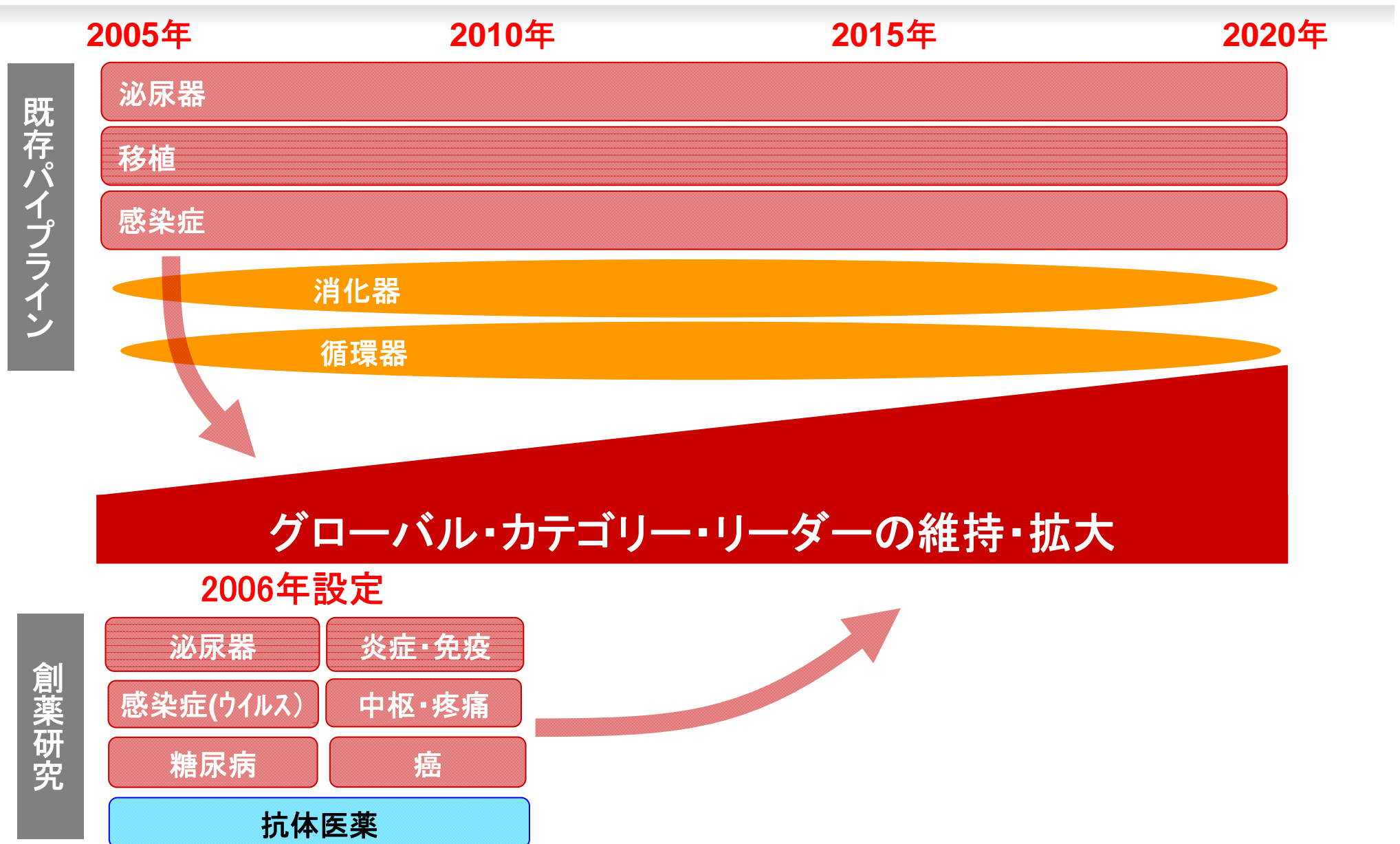
- ◆ ムンバイに事務所を設立。製品開発や販売戦略策定のための各種調査・情報収集などを進め、今後のインド市場参入について検討

※インド市場

- 人口約11億人、近年では年率10%程度の経済成長
- 感染症用薬を中心としたインドの医薬品市場は現在約62億ドル、アジアでは日本、中国、韓国に次いで4番目の規模

- ◆ アステラスのVISION・・・VISION 2015
- ◆ VISION 2015への取組み
 - ◆ 強固なビジネス基盤の確立
 - ◆ **製品創出力向上**
- ◆ アステラスのメッセージ

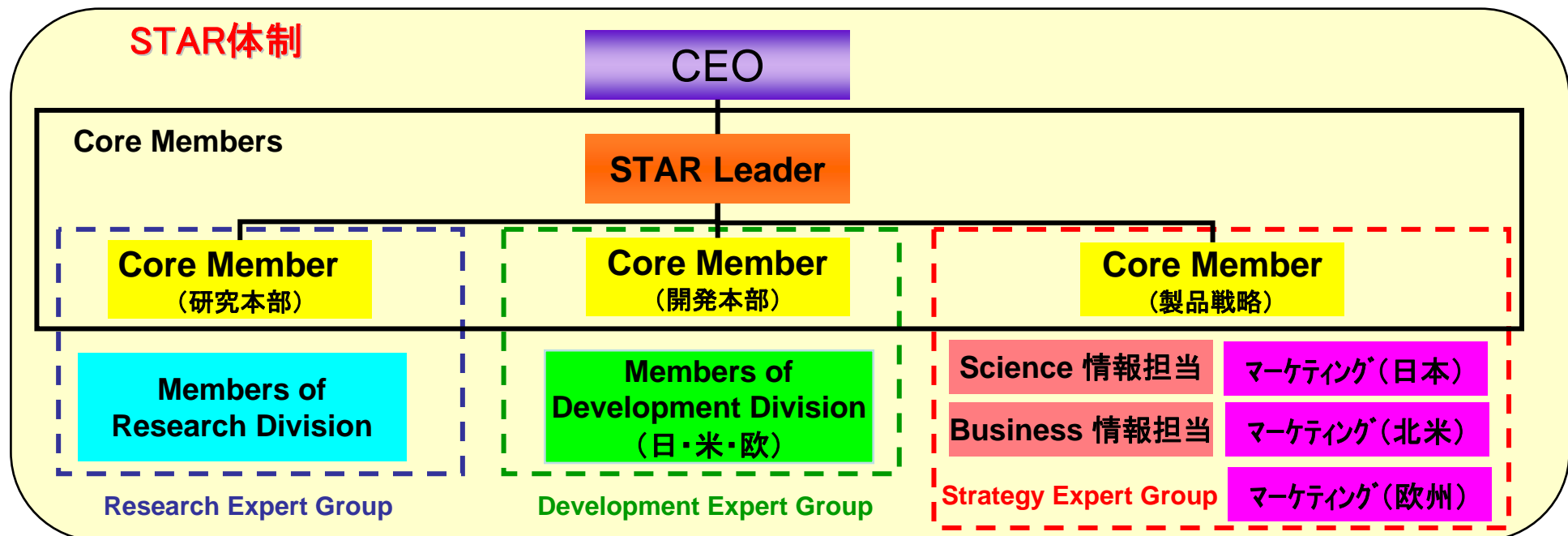
グローバル・カテゴリー・リーダーへのアクション



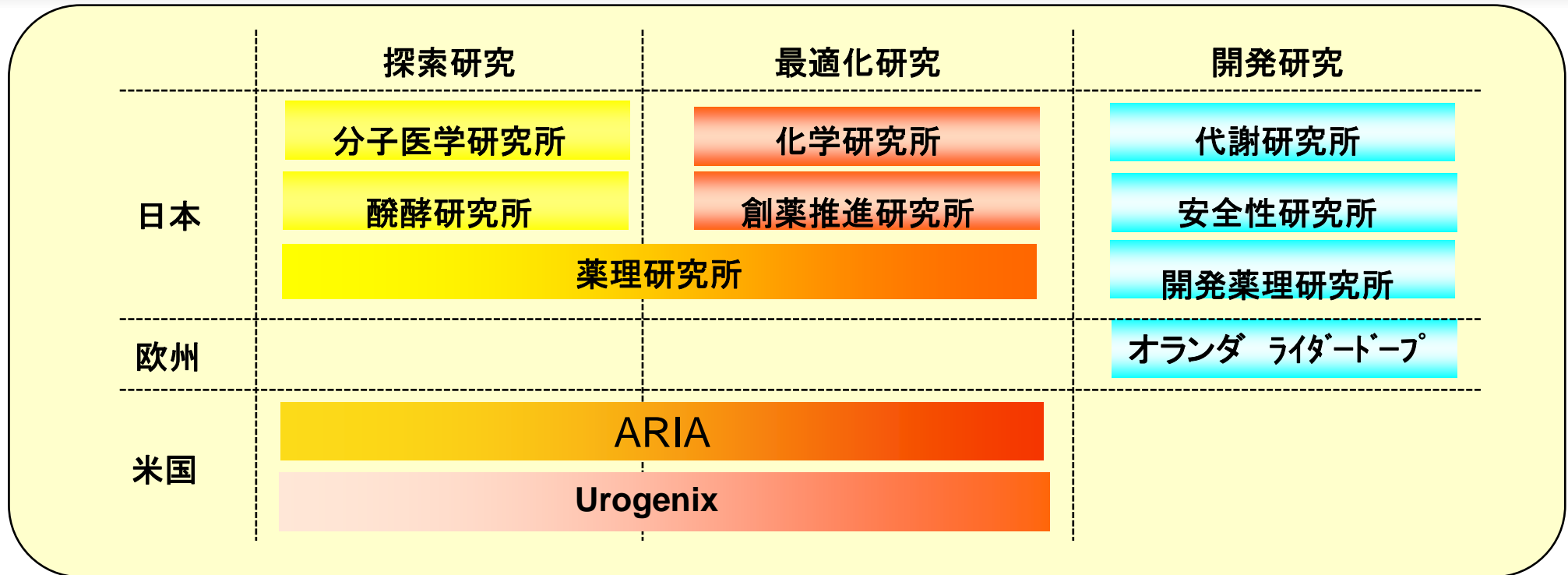
カテゴリーリーダーを目指す部門横断プロジェクト

STAR (Strategy Team for Therapeutic Area Reinforcement)

- 研究・開発・導入・ライフサイクルマネジメント全体にわたる戦略的推進体制の強化をはかるグローバル／部門横断的な領域マネジメント組織
- 社長直轄のもと、泌尿器、炎症・免疫等、重点領域毎にチームを設置
- 各領域のリーダーのもと、研究・開発・製品戦略・マーケティングから選任されるメンバーから構成
- 必要に応じ、技術、ライセンス等のメンバーも参加



研究組織の再編



分子医学研究所と薬理研究所の機能再編

- ◆ 薬理研究所・創薬研究機能を8領域に再編
(免疫、炎症、感染症、生活習慣病、泌尿器、糖尿病合併症、神経科学、癌)
- ◆ 分子医学研究所・テクノロジーをベースに研究機能を再編

開発薬理研究所を新設

- ◆ 臨床開発・申請に必要な薬理データの取得、トランスレーショナル研究の推進

御幸が丘(筑波)研究センター 新棟建設

- ◆ 御幸が丘研究センター内に地上6階、地下1階の研究棟3棟と、全ての研究施設をつなぐ居室棟と厚生棟(会議室・食堂)を新設
- ◆ 居室棟は研究員のコミュニケーションが常に可能となるオープンプロア方式
- ◆ 新棟完成後、創薬研究は筑波地区(御幸が丘、東光台)に、開発研究は加島地区に集約
- ◆ 総工費約300億円、2008年8月完成予定



ARIA (Astellas Research Institute of America)

1996年8月 ノースウエスタン大学リサーチパークに 設立

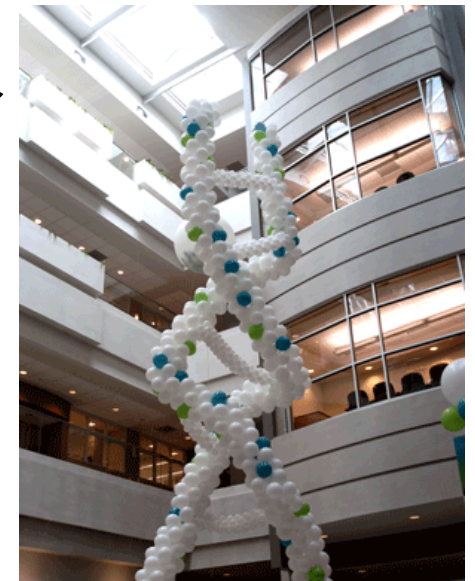
- ◆ プログラフの薬物動態学研究、免疫関連疾患のメカニズム解明のため分子生物学・薬理学研究を実施

2005年4月 合併時にAstellas Research Institute of America に改称



2007年5月 重点研究領域である移植領域での製品創出力向上のため、移植探索研究を強化

- ◆ 移植免疫基礎研究に加え、薬剤標的探索研究、臨床バイオマーカー探索研究、薬剤の吸収・代謝予測研究を実施
- ◆ イリノイサイエンステクノロジーパークの新研究所に移転
- ◆ 研究者の増員(15→30名)・・・日本の免疫領域研究担当がARIAへ



2006年3月 Dynogen Pharmaceuticals, Inc.が所有する
ノースカロライナ州の研究機能を購入



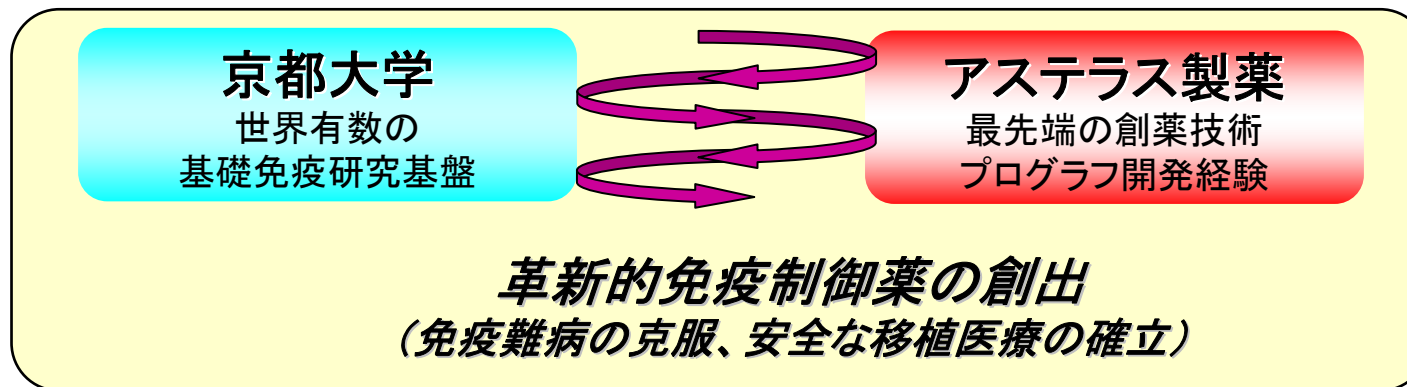
Urogenix, Inc.

- ◆ 重点研究領域である泌尿器領域における創薬研究基盤の強化・拡充
- ◆ 薬理研究所泌尿器研究室との緊密な連携



次世代免疫制御を目指す創薬医学融合拠点

- ◆ 最先端の基礎免疫学研究の成果と創薬技術の融合による、次世代の安全で革新的免疫制御薬の創出を目指し、基礎研究段階から、長期にわたり(最長10年)、産学が共同して研究開発を推進するための拠点。
- ◆ 本融合拠点では創薬システムのイノベーションとともに、基礎医学研究、創薬技術、知的財産管理などに精通した創薬医学研究者の養成にも貢献する。



- ◆ 2007年10月 京都大学内に研究拠点が完成 研究をスタート



抗体医薬への取組み

抗ヒトオステオポンチン抗体 ～免疫生物研究所から全世界の権利取得～（2006年3月）

- ◆ オステオポンチン: 関節リウマチを代表とする自己免疫疾患、骨疾患、がん転移等に関与する蛋白質
- ◆ 関節リウマチを適応症として開発

CD40アンタゴニスト抗体 ～キリンビールと共同研究開発の開始～（2007年1月）

- ◆ 臓器移植時の拒絶反応抑制を目標適応症として開発
- ◆ 抗原提示細胞上のCD40受容体とT細胞上のCD40リガンドの結合を阻害し、免疫反応を抑制する

ファージ抗体ライブラリー ～MorphoSys社から導入～（2007年3月）

- ◆ 自社抗体医薬研究の質的向上・効率化・迅速化を図る目的で導入
- ◆ 従来は困難であった種保存性の高い抗原に対する抗体が得られる可能性がある
- ◆ 得られた抗体を改良することで、優れた完全ヒト型モノクローナル抗体を得ることが可能

ヒトモノクローナル抗体開発技術 ～Regeneron社から導入～（2007年3月）

- ◆ 高い結合親和性と生物活性を有する完全ヒト型モノクローナル抗体を迅速に取得できる技術

分子医学研究所を中心に抗体医薬研究始動（2007年10月）

- ◆ 従来技術に加えMorphoSys社やRegeneron社からの技術導入により標的分子検証用のツール抗体、開発候補抗体を迅速に創製できる体制を整備。

Agensys社を買収（2007年11月）

- ◆ 完全ヒト型抗体作製技術、癌の独自標的分子及び開発抗体を取得
- ◆ 抗体医薬創出のスピード化と重点研究領域の一つである癌領域を含む自社抗体医薬研究体制の一層の強化

Agensysの強みを最大に活かし、抗体医薬を早期に事業化する

Agensysの強み ー癌領域を中心にした高い技術力とパイプラインー

■ 基盤技術

- ヒト癌組織を用いた遺伝子発現解析の手法により、14の癌種から30の新規標的抗原を発見
- 成立特許数は100以上、出願済み特許数は約300
- 最適化した免疫・ハイブリドーマ作製関連技術
- ルーチン化したヒト組織由来担癌マウスモデルでの薬効評価系
- トランスジェニックマウス(XenoMouse®)での完全ヒト型抗体取得

■ パイプライン

- P-1b:1個, P-0:2個, 前臨床8個

■ 生産能力

- 抗体(治験薬)生産能力

高い成長が期待される抗体医薬事業への貢献

- Vマウスを用いた自社抗体基盤に対する定量的貢献
 - 年間投入標的数の拡大
 - 標的投入から抗体取得までの確率向上
 - テーマ立ち上げからP1入りまでの創薬期間の短縮
- 抗体医薬パイプラインへの貢献: 臨床開発候補化合物の充実
- アステラスの癌領域低分子研究への貢献
 - Agensysで見出された標的から低分子創薬に成功する可能性
- 抗体生産への貢献: 治験薬の生産基盤を即座に入手

- ◆ アステラスのVISION・・・VISION 2015
- ◆ VISION 2015への取組み
 - ◆ 強固なビジネス基盤の確立
 - ◆ 製品創出力向上
- ◆ アステラスのメッセージ

アステラスの存在意義 「先端・信頼の医薬で世界の人々の健康に貢献する」

グローバルカテゴリーリーダーとして
アンメットメディカルニーズに挑戦することで、

本当に求められる新薬を創出し、
世界中の病気と闘うすべての人々に
勇気・希望をもたらしたいという

アステラスの想いを込めたメッセージ

明日は変えられる。

明日は変えられる。

